

---

# ゴブリンなめんなよっ？！

ビビ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴブリンなめんなよっ？！

### 【Nコード】

N4364J

### 【作者名】

ビビ

### 【あらすじ】

時代錯誤の侍は決闘中に第三者の手によって殺された。銃による不意打ち。死した侍は新しい命を得る。得た命はゴブリンのものだった。そこから始まるファンタジー。

この作品はArcadiaのオリジナル板で同名で投稿しています。ちなみにここです。

```
http://mainet.ath.cx/bbs/sst/  
sst.php?act=dup&app;cate=orig  
inal&app;all=15594&app;n=0&app;  
count=1
```

## 序章・始まりの終わり（前書き）

この作品は作者：ビビの技術向上のために書いているものです。  
手厳しい批判や痛烈なアドバイスなどが欲しいです。

どんなことを言われてもほとんど気にしない性格なので、悪いところを挙げて、ここがまずいんじゃないの？ 的なアドバイスをお願いしますorz

## 序章・始まりの終わり

このご時勢で馬鹿なのかもしれない、と思う。ただ、やめることなどできるはずもない。

夜の帳が落ちた世界は俺たちのものだ。

指定された場所は山奥深くの遊歩道。

人が通らなくなって久しいのか、草が生い茂り、落ち葉のせいで地面が見えない。

ざり、と葉を踏みしめる

時代錯誤。

そんな言葉が浮かぶ。

現代世界でいるはずのない侍装束を着た青年が目の前にいるのだから。

腰には刀を差して、俺を睨んでいる。

「よいな？」

刀には手をつけず、俺にそう問うてくる。

ああ、準備はできている。覚悟はできている。

剣を極めると決めたその日、俺は修羅道を突き進む覚悟を決めている。

だから、答えるべき言葉は一つ。

「応よッッ！」

時代錯誤と言った。

俺も羽織と袴という衣装だ。

バツ、と羽織を広げて片袖になる。

(たまんねえ、何度やってもこの緊張感はやみつきだ)

ピンと張り詰めた空気。

風の音しか聞こえない。

それすら消えて 無音。

ざわめきすら消えて、全ての音が俺の耳からは消えてなくなる。  
睨み合う。

俺も隙を見せず、敵も見せない。

見せたら終わる。一瞬で勝負がつく。

ザアアアア

一陣の風が吹く。

視界を遮るほどの葉の群れ。

「いざ」

「尋常にツてか！」

視界を覆う葉を無視して覚悟を決めて前へ出る。

敵は刀を抜かず、迎撃の構え。居合い。

面白い。

俺は刀を抜いて青眼に構える。

居合いが来ても受けきる ツ！

「ぬんっ！」

互いに踏み込む。

右から襲ってくる神速の居合い。

光としか思えぬほどの視認すら許さない神速。

だが、予測していた。

鮮烈な火花が散り、それこそが刃を受け取った証明となる。  
だが、それとは違う音が聞こえる。  
パシユツ、という間抜けな音

「あれ？」

どういうことか。

俺の刃は受けきったはずなのに俺は今、背中を穿たれている。  
背中に触れる。  
血だ。

「間抜けめ」

うつ伏せに倒れている俺の頭を蹴り飛ばす敵。  
その顔は醜かった。

「お前みたいなのが物と正々堂々と戦うわけないだろう？」

木陰から新たに人が出てくる。  
そいつらは俺を見下し、笑っている。手には小さな銃     ああ、  
そうか。俺はハメられたのか。

「剣神と呼ばれたお前も銃の不意打ちには耐えられなんだな」

時代錯誤。

こんなご時勢に剣に生きた末路。

案外死ぬときは呆気ないものなのかもしれない。こんな風に。  
死ぬのはいい。別に未練もない。  
だが、興味もある。

「 なら、お前は何故剣を持つ? 」

答えは返らず、意識は闇に落ちていく。



## 序章・始まりの終わり（後書き）

なんでこんなのを書き出したのか自分でもわからない。

ただ、やってみたい、と思ったんだ。

それだけなんだ。

ただそれだけのことだけれど、俺はあえてその気持ちを大切にしたい。

何事も冒険なんだよお！

## 1-1・ゴブリン村のユウト

1.

見目麗しい　　そう表現することに何のためらいもなくできる。  
彼女はそれほどに美しい容姿をしていた。

新緑の恵みであるかのような若草色の髪は肩ほどまで伸びており、時折風でふんわりと流れていく。小さな顔の中には、ぱっちり開いた大きな空色の瞳、通った鼻梁、ぷつくらと膨らんだ触れば気持ちよさそうな淡い赤の唇。それらが絶妙なバランスで配置されている。

背は140cmを少し超えるくらい。小柄と言っても全くおかしくない身長だ。そんな彼女を女たらしめているのは出るところは出て、引っこむところは引っこんでいるためだろう。背徳的な魅力に溢れている。その魅力を加速度的に高めているのは、純白のワンピースに髪と同じ色のクロークという子供っぽい服装をユピーが好んでいることも一因としてあるだろうが、最も彼女を引き立たせているものは何か。それは、背から生える一対の羽だろう。

人ではありえない淡い虹色が浮かび上がる透き通った羽は彼女が人間ではないことを物語る。そう彼女　　ユピーは人から邪悪な妖精として忌み嫌われているピクシーだ。正真正銘の魔獣である。

そんなユピーが住まう場所は人里離れたところにある森　　フィツツネルの森だ。そこには様々な魔獣が住んでおり、ピクシーもその中の一つではあるが、ユピーが今いる場所はゴブリンと呼ばれる種族の村だった。

あばら屋と呼ぶしかないような小さな穴だらけの小屋。いや、小屋というの憚られるような代物ばかりが立ち並ぶ村だ。地面からは草が生い茂り、村というよりも森の一部といったほうがしっくりくる。荒地　　とでも呼べばいいのか。

物陰には多くのゴブリンが潜んでおり、ユピーのほうをギラつく視線で見つめている。ユピーに対して劣情を抱いているのだ。性欲に塗れたゴブリンたちの視線を平然と受け流しながら、というよりも受け止めながら、ユピーは艶然と髪を掻き上げたりしている。

「まあ、私の美しさの前では仕方のないことだけねど？」

この言葉だけでユピーの性格がわかるというものだろう。

ゴブリンの村をこれほどまでに余裕の体で歩けるのはピクシーの中でもユピーくらいのものだ。だから、こんなところに一仕事するためにユピーはわざわざ赴いているわけなのだが。

ユピーの住む場所はゴブリン村の東に2時間ほど歩いたら着く距離にある。ピクシーの村だ。

一仕事というのはピクシーの村にゴブリンの村から材木を輸送してもらったことである。

ゴブリンというものは馬鹿で、醜い。長所といえば年中発情期なので繁殖力がとても旺盛であることと、細い木であるならば拳一発で折ってしまうことであろうか。怪力なのだ。

細い木が相手でも、ピクシーの貧弱な筋力では刃物を使っても3時間かけて切るのがせいぜいだ。そのため、効率の問題でゴブリンたちをお願いして木を切り倒し、村まで運んでもらうのである。

その過程で以前の担当者であったピクシーが、木を切り倒すことをお願いしたはずなのにも関わらず、身体を押し倒されてしまうという悲劇により（未遂に終わった）、「もう二度とこんな仕事嫌よ！絶対にお断りよ！」という意見が出て、ユピーにお役が回ってきたわけである。

「ゴブリン如きに押し倒されるなんて、私なら死んでも言えないわ」

ユピーは同僚に対し、心からそう思っていた。

何故なら、愚かで鈍重で醜悪なゴブリンに負けるなんてことはピクシーにとつてあつてはいけないことだから。これはピクシーの中でも共通認識である。というよりも、魔獣の中では共通認識と言つてもいい。

ゴブリンは 最も弱いとされているのだ。

そんなことを考えながら歩いている内に、ユピーは村を通り過ぎていた。

ゴブリンもいなくなり、一気に森の色が濃くなる。ゴブリンたちの住まう村とは違い、緑の匂い。ゴブリンは臭いのだ。臭気が充満した村を過ぎたユピーは解放感に満ち溢れていた。

ユピーの目的地はゴブリンの村の外れにある、開墾されていない伐採地だ。詳しい場所を知らされているわけでもない、ユピーはのんびりと歩きながら探しまわることになる。

特に急いでいるわけでもない、ユピーはゆつくりと歩きながら頭の中で思い浮かべる。

思い浮かべることと言えば、ユピーが襲われた場合、どういふふうにゴブリンを料理しようか、ということだ。

【フレイム火炎】で焙るのもいい。【アイスクリ氷柱】で串刺しにするのもいい。【ウィンドエッジ風刃】で切り刻むのもいい。

【アースロー土牢】で地面に沈めるのもいい。

ユピーは嗜虐的な笑みを浮かべることを止めることなどできなかった。久しく戦闘をしていないのだ。ユピーは弱いものイジメは好きではないが、今日はやってもいい気分であつた。

とても危険な思考に没頭しながらユピーは歩いていたが、その思考は停止することになる。

ユピーの視界の中は林立する木々と、青い空、後は空を気ままに流れる雲くらいしかなかったのだが、突如、遠くに『にゅっ』と木が伸びたのだ。そして、木は倒れていった。とてつもない大樹。ユピーの背丈の何倍もありそうなそれが倒れたにも関わらず、物音一つしない。

それを見て、感じて、気づいて、ユピーは驚きのあまり立ち止まら

ざるを得なかった。

「今の 何？」

思わず言葉が漏れてしまったことをユピー自身気づいてはいない。何度も何度も『にゅっ』と大樹は伸びては倒れ、伸びては倒れを繰り返す。規則的に、狂うことなく繰り返されるそれはユピーの好奇心をとてつもなく刺激した。

背にある太陽光を反射して淡く輝く一対の羽を使い、ユピーは空を舞う。

邪悪な妖精と言われるピクシーが空を飛ぶ姿はとても幻想的だ。見る者を魅了する力がある。ユピーはピクシーの中でも一際美しいだけあって、とてつもなく輝いていた。が、誰も見ていない。

ふわふわと空を飛び、ユピーは空から何度も立ち上がったては倒れていく木を探した。それは一瞬で見つかった。小さな何かの木を振り回しているのがユピーには見えた。

「まさか あんなデカイ木を振ることができる人がいるの？」

ユピーは感嘆の吐息を洩らし、急いで現場へ向かった。

ピクシーの空を駆ける速度はとてつもなく速い。彼我の距離はおおよそ1kmはあるうかというものであったが、その距離はわずか30秒ほどで駆け抜けてしまう。

木を振り回している何かの上にユピーは辿り着き、見下ろしながら観察した。

そこにいたのはゴブリンだった。100cmを少し超えたくらいのゴブリン。大きな頭に異様なまでに太い身体をした小さな身体だ。肌は浅黒く、額からは捻じれた角が一本生えている。腕はとてつもなく太い。

だが、そんなものは問題ではなく、そのゴブリンはゴブリンでは

あるが、とてつもなくゴブリンっぽくなかったのだ。理性のある切れ長の目、硬く結ばれた唇。下品なところのない、精悍な顔つきだった。

そのゴブリンが犯人だったのだ。

「300！ 301！ 302！ 303！」

と腹から出ている大音声で数を叫びながらひたすらに木を振っている。

その木は実にユピーの身長の6倍超。こんなものを振れるゴブリンがいるということにユピーは感動すらしていた。

ユピーはこれまでゴブリンのことを卑下していたが、己を鍛えるゴブリンがいるということを知り、少しばかりゴブリンという種族の認識を修正した。

「中にはまともな奴もいるってわけね」

淡々と繰り返される大木による素振りをユピーは真上から見学していたが、ピタッ、とゴブリンは動きを止めてしまった。

じろり、とゴブリンはユピーのほうを見上げている。心なしかゴブリンの頬が赤く染まっていた。

ゴブリンが気づいたことを確認すると、見学を止めてユピーはゴブリンの隣に降り立った。すたん、と軽快な音を立てて。

着地したときに生じる風の流れにより、ワンピースの裾がひらりと舞い上がってユピーのパンツが衆目　ゴブリンに晒される。ゴブリンは釘付けだった。

その視線を感じながらもユピーはにこやかに微笑みながらゴブリンに話しかけることにした。ユピーよりもかなり身長が低いので、膝を曲げて視線を合わせて、だ。

「こんにちは」

ユピーは少しばかり緊張気味だ。ひらひらと羽を動かすのはユピーが緊張しているときの癖。本人に自覚はないが、とても警戒しながらゴブリンに話しかけている。

かくいうゴブリンはユピーに対して興味を失ったかのように、ぶい、と目を逸らすと、また木を振り始めた。

先ほどとは違い、黙々と木を振る。

木が振り落とされるたびに強烈な風が巻き起こり、ユピーの身体に叩きつけられる。ぶうん、と凶悪的な音を奏でるのを聞きながらユピーは顔を歪ませていた。不愉快だったのだ。無視されたことが、淡々とこなしているゴブリンに対し抗議の視線をユピーは向け続けていたが、全く相手にされなかった。その間、実に5分。ユピーの堪忍袋の緒が切れるには十分な時間だった。

綺麗なオデコに青筋を立たせ、ゴブリンに近づいて見下ろす。膝など曲げず、ユピーは怒りに染まった瞳でゴブリンを見据えて脳天に手刀を落とした。

ビシッ、という間抜けな音が森の中にこだまする。そこにはゴブリンの頭にチョップを叩きつけて、逆にダメージを受けているユピーの間抜けな姿があった。痛み悶えている。

ゴブリンは木を振うのを止め、困惑しながらユピーを見ていた。キッ、とユピーはゴブリンを睨みつける。

「良い度胸しているじゃない？ 私の自慢はね。私に敵対してきた者は全員叩き潰してきたことなの。そしてね。敵ってというのは貴方のことよ。私のことを無視するなんて 本当良い度胸してるじゃない？ その喧嘩買ったわ！ ボコボコにして 「こんにちは」は？」

唐突に挨拶をされてしまい、ユピーは戸惑った。返事を待たず、

ゴブリンはすつと目を背けるとまた素振りを開始した。

木が振るわれるたびにゴブリンの手が木の幹に食い込んでいく。メキ、ボキ、と響いてはならない音がユピーの耳に幾度も届く。

その不愉快な音によってユピーの麻痺した思考が再び動き出した。ゴブリンの行動パターンがユピーの知る行動パターンの一つと全く同じだということに気づいてしまったのだ。

ユピーは注意深くゴブリンの方を見つめる。

木が振られるたびにゴブリンはちらちらとユピーのとある部分へと熱い視線を送っている。巻き起こる風で翻ったユピーのワンピースの中にあるモノを必死に見つめているのだ。このことにユピーは気づいてしまい、ニタァ、と下品な笑みを浮かべる。

ユピーはこういう男の子をしている者をからかうのが大好きだ。大きく振われた木が巻き起こす風の悪戯を、ユピーはワンピースの裾を手で押さえつけることによって聖域を見られることを防ぐ。がっかりとしたゴブリンの表情がそこにはあった。

「ねえ」

ユピーは笑いを堪えながら、声を出す。

ゴブリンは呼びかけに反応し、無言のままユピーを見た。

「パンツに興味あるの？」

ぶほっ、とゴブリンは噴出してしまふ。どうやら図星のようだった。

ゴホンゴホンと咳き込みながら、ゴブリンは真っ赤になって首を振っている。ユピーはその行動を見て、とても楽しそうに笑う。

その笑いを否定するかのようにはゴブリンは口を開いた。

「き、興味なんてないぞ！ 俺は前世から 剣に生きることを誓



っているんだ！」

ゴブリンは先ほどまで握っていた木を背後に放り投げて身振り手振りで必死に否定している。ユピーはゴブリンの言い訳など見ずに、軽い動作で放り捨てられた木の末路に釘付けになっていた。他の木をなぎ倒しながら落下する木はなかなか壮観だ。

地面が揺れる。木が落ちたのだ。とてつもない重い音。自然とユピーは身が竦んでしまったが、気を取り直してゴブリンのほうを見る。まだ言い訳をしていた。

「まあ、何を言おうと貴方が私のパンツを視姦していた事實は変わらないわ。スケベ」

「女ア！ お前は俺を愚弄する気か！ 俺がスケベなどと「ほれ」　　グハアッ！」

ユピーは自らの手でワンピースの裾を翻した。ひらり。

ゴブリンは顔を真っ赤にしながらもとてつもない集中力を感じさせる熱い視線をユピーのパンツに向けていた。にやり、とユピーは笑う。

「スケベなどと　何だって？」

「俺の名前はユウト。お前も名乗れ。侍である俺を侮辱した罪贖って貰う！」

ユピーの笑顔が気に食わなかったのか、ユウトと名乗るゴブリンは地団駄を踏む。そのせいで大地は揺れるが、全くユピーは動じない。恥じらう男子はユピーの大好物だ。ゴブリンなどという種族など関係なく、ユピーのからかう獲物に過ぎないのである。

「ユピーだけど。とりあえず木を運んでくれない？　貴方が木を運

んでくれるゴブリンなんでしょう?」

「どこまで人を虚仮にすれば　ッ!」

「否定はしないのね?　じゃあ、さっさと運んでくれない?」

こういうタイプは案外律儀であることをユピーは知っている。

だから、こういうふうにすれば案外

「後でだぞ!　後で絶対に俺がスケベじゃないことを証明するから  
なっ!」

「はいはい」

ぞんざいに扱いながらユピーは頭の中でこんなことを考えていた。

「良い玩具見つけた」

幸せそうな微笑みをユピーはしていたのだった。

## 1-1・ゴブリン村のユウト（後書き）

はい、誰が転生したとかはもうね。言わない。言わないようにする。だって新ジャンルだもの。謎に包まれてるんだもの。

おぎゃあ？ないない。おっぱい吸うシーンとかないよ。

だってさ。ゴブリンの搾乳シーンとかさ。嫌じゃない？嫌悪感出ちゃうじゃない？つか書きたくないし。何事なの？みたいだね。

ああ、落ち着いて聞いてほしい。

別に悪気があつてこんなことを書いているんじゃないということも察してほしい。

いっぱいいっぱいなんだ。女の子とか書いたことないし。ヒロイン？なにそれ。化物語の撫子しか思い浮かばない。それが真宵。あれは神。

とりあえずそれを目指そうと思つたら全然違うのになつてた。何事？ヒロインとかさ。そういう目指すのが間違つてるんだと思う。

心から湧き出してくる欲望の根源を具現化したもの。それがヒロイン足り得るものなんだよ。

そしたらこうなつた。後悔しかしていない。

だけど、負けない。私は負けない。

私はゴブリン道突き進む。魔獣ファンタジーを描きぬく！

賞賛と喝采とほめ言葉をお待ちしております。

ちなみに作者はMでツンデレなので批判的なコメを見てもニヤリと笑います。

ビビです。

## 2・ゴブリン&ガールはウォークするナウ

2.

木を運ぶように確かに言った。

本数は言わなかったけど、確かに言った。

だけど、5本で ユピーの身長の6倍はありそうな木を5本ほど抱えて軽快にユウトは歩いてた。

麻縄できつく縛ったソレを肩に何気なく担いでいるだけ。何気なく担げるようなものではないのはさすがのユピーでもわかる。

小さな身体を包んでいるのは片袖しかない麻の服。

腰のところは縄でくくり、裾が広がり過ぎないようにしている。

そして盛り上がっている肩の筋肉。浅黒い肌が競りあがり、膨張している。ちよっとドキドキするが、顔が見えた瞬間に一気に醒める。

まあ、ほら、不細工だし？

「力持ちだね？」

ユピーは後ろをテクテクとついてくるユウトを褒めてみた。

実際すごい力持ちだと思うし。こんなに持てるならもっと違う仕事すればいいのに、と思う。

ここらを治めるゴブリンロードに立ち会えばすぐに出世できそうなものだ。

強い魔獣は出世する。知能が高い魔獣も出世する。どちらも兼ね備えているなら完璧だ。

「そ、そんなことねえよ！」

照れている。知能はあるかもしれないが、かなり残念な部分もあるのかもしれない。

そんなことねえよ、と言いながら目を逸らす。微妙に行動が可愛い。

それからムスツとして淡々とユピーの後ろをついていった。

「ところで、ユウトだっけ」

少し開けた場所に出る。

照りつける太陽が暑くて、ちょっと休憩したい気持ちになり、ユピーは地面に腰を下ろしてユウトに声をかけた。

そうだけど、とユウトは答える。

休憩するのかな、と思って木を肩から下ろし、少し距離を開けて隣に座る。

（なんかいちいち小動物みたいだなあ。くっついてこないところなんか特に）

力が強いくせに妙にユピーに対して警戒しているユウト。

ユピーからすればユウトが意識しているせいで近づいてこないことはバレバレである。伊達に女をやっていない。

それがユピーにとっては少しばかり快感だ。

顔はどうであれ、自分に好意を寄せている異性というのは可愛いものだ。まあ、キモイ奴もいるが。

まじまじとユウトのほうを見る。

ちょっと話したただけだが、ユピーの中でユウトの人物像がだいたいできていた。

態度を見る限りプライドは高い。ゴブリンにしては頭も良く、身体を鍛えているところなどポイントが高い。男はやはり力がないとそれに、妙に可愛げがある。女慣れしておらず、初心だ。それが

ユピーの嗜虐心をそそる。

照れる男の子ほどそそるものはない、というのがユピーの持論だ。照れさせるためには情報がある。よって、いろいろと聞き出してみよう、という結論に至った。

数瞬の間に考え、ユピーは実行する。

「なんであんなところで伐採の仕事なんてしているの？とても強そうに見えるのだけれど。勇者を倒して名を上げようとかないの？」

勇者？ とユウトはオウム返し。

なんだそれ、と言わんばかりの疑問符に溢れる表情。その応答に疑問を覚えつつもユピーは話を続ける。

「うん、また新しい魔王が出たみたいだし。なんていうんだっけ。

部下に倒される人のこと」

「下剋上？」

ユウトの評価に一つ加わる。難しい言葉を知っていることを。+  
1点。

「そう、それぞれ。腹心である副魔王だったヴァリアーって魔族が寝込みを襲って魔王に成り代わったらしいし。今人間に対して熱烈な攻撃中よ。だから、今ゴブリンの村もだんだんと数が減ってるでしょ？」

二ヶ月前のことだろうか。

魔王に対して反旗を翻した副魔王ヴァリアー。

平和主義者だったのだ。それがヴァリアーには気に喰わなかった。殺したい、殺されたい、殺しあいたい、という破滅主義者がたぶんに魔獣の上位を占める。

おかげで今は戦争の真っ最中。

ユウトとユピーが住まう場所は戦禍の場所からは遠く離れており、巻き込まれることはない。けれど、若者は戦功を求めて軍に加わる。そのせいで過疎が進んでいるのだ。

ゴブリンの村もユピーが見る限り若者がとても減っている。ユピーの村だってそうだ。男はだいたい旅に出た。

(私より弱いくせに旅立つ勇氣があるのは不思議だったわ)

ユピーの幼馴染も何人が軍に志願して出て行った。

俺は大きくなって帰ってくるから、だから待っていてくれよ！ などと言って出て行った奴もいる。名前は忘れたが。

ユピーは自分より弱い男に興味はない。

その点では目の前のゴブリンは評価できる、とユピーは考えている。何せ、明らかに自分よりも強いだろうから。

ふむふむ、と考え込むユウト。

少し離れた場所に座っていたのでお尻を少し浮かせて近くに行ったら同じ距離分移動された。チツ。

「ああ、そういう理由で減ってたのか。知らなかった」

離れた瞬間、気がついたようにユウトはぼやく。

「え？　なんで知らなかったの？　友達とかから聞かないの？」

「とも、だち　？」

風が吹いた。

木の葉が落ち、ユウトとユピーの間を何枚も横切る。

呆けたような表情を浮かべるユウト。

ユピーは即座に反応してしまった。

「う、ごめんなさい」

謝らなければならない、と思った。

こつこつというデリケートな問題は深く立ち入るべきではない、というのがユピーの人生で得た教訓だ。

ユウトは首を傾げる。なんで謝んだ？ と。

答えなければならないのか、とユピーの頬に冷や汗が流れる。白磁のような肌は少し青ざめている。きついつてこれ！

でも、あえて思っていることを正直に伝えることにした。

「友達いないんでしょう？ だから、そんな反応を」

「いないんじゃない。できないんだ」

「訂正する意味あるの？！ 余計酷くなってない？！」

なんで即答した？！ 間がないよっ！

淡々と訂正した言葉にユピーはツツコミを入れずにはいられなかった。

ユウトは気にしたふうでもなく、

「というより、聞きたいことがあるんだ」

あっさりとは話題を変更しようとする。

ユピーとしてもこの話題はなかなかへビーだと思ったので、何？ と乗ることにした。

「仕事って 自分で選べたのか？」

え？ とユピーは漏らしてしまふ。



「気づいたらハブられて、いつの間にかあんなところで伐採して運送する役割を与えられていたんだが」

「ちよ」

「自由気ままで気に入っているが、さびしくないか？ と聞かれたら涙が出るかもしれない。たまに話せる人たちはみんなお前みたいな女の子ばかりだ。ピクシーと言ったか」

「月に一度だけ?!」

交易は月に一度だけ。

それ以外は会話なしということなのか。

ユピーは思う。心から。かわいそうだ、と。

つまりはユウトにとってはピクシーだけが会話してくれる相手ということか。

ふむ、とユピーは考える。

なるほど。これほど知能のあるユウトなら他のゴブリンと話も合わないだろう。あいつらは本能のみだし。寝る、犯る、食う、の3つ以外に全く興味を示さない。何故群れて村を作れているのかがまづ不思議なのだから。

まあ、ゴブリンにも頭が良い奴がいるからそいつらが束ねているだけなのだが。

そんなことを考えていると、ユウトはじつとユピーのことを見つめていた。

何よ？ とユピーは返す。

「君は話しやすいな。前の子は何かいろいろとやり辛かった。頭を撫でるのはどうにかしてほしかったな」

「へ、へえ」

( 思いつきりガキ扱い      まあわかるけど )

「まあ、こちらとしては貴方みたいなゴブリンのほづが安心だけだね。評判良かったわよ？　面白い奴って」

「お、面白い　俺が？」

からかい甲斐があるとも言つ。

「うん、予想外にヘンテコで笑えるわよ？　他のゴブリンにはないセンスを感じるわ。他のゴブリンは馬鹿ばかりでね。『オデ　オマエ　スキ　ヤラセロ』ばかりなのよ。全く、湖面で自分の顔を見ろつての。醜男　アハハハ！」

まさに高笑い。哄笑。

これでもか、と言わんばかりに美少女（自称）であるユピーは笑い飛ばした。

キモイゴブリンを見下すのは大好きだ。なぜかって？　比較対象がいると美しさがより明確にわかるから！

「え、じゃあ俺って格好良いの？　評判良いつてことはそついついと？」

「いいえ？　十分に不細工よ？」

何勘違いしちゃってるの？　という冷たい視線。

「……………」

ユウトは俯いた。

ソレを見て、はぁん、とユピーは声を漏らす。

そして、近づいていって下から覗き込むようにユウトの顔を見た。

「あ、傷ついた？　ねえ、傷ついた？」

「傷ついてなんかないし……」

「ごめん プ、アハハハ！ 顔のこと気にしてたんだ？ あー、アハハ！ ごめんねえ？ プッ、ククク」

笑いをこらえるようにユピーは時折顔を背けて口を手で押さえる。

「いつそのこと盛大に笑え。自分の顔のことなんざ一番俺が知っている」

「冗談よ。なかなか可愛げがあるわよ？」

実際可愛げはある、とユピーは思う。

なんか面白いし、コイツ。いじり甲斐があるとも言っつ。

「本当？」

と目を輝かせてユウトはユピーを見る。

「アハハハハハ！ おかし！ ハハハ！」

思いつきり笑うユピー。

「……………もういい」

凹んだユウトは立ち上がり、木を担いだ。

早く行こうよ、と言わんばかりにユピーの隣に立って手を差し出す。

頷いて、ユピーは手を取って立ち上がる。そして、ユウトの頭を撫でた。つい、撫でた。

「がんばりなよー？」

と言って、軽快なリズムを奏でながらスキップで移動し始める。

「知ってるだろうけど、ピクシーの村はもうすぐよ。後ちょっと」  
「うん」

「ご飯くらいご馳走するわよ?」

ピク、とユウトの耳が動いた。

そして、うん！ と大きく返事をする走りながらユピーを追いかける。

ユピーの隣まで追いつくと、楽しみだなあ、と口笛を吹きながら喜んでるのがわかる。

無駄に表情豊かだ。ゴブリンの生態ってこんなだったっけ？ とユピーは考えてしまう。

まあ、いるからこんな奴が存在するのだろうか。  
開けた場所から少し進むと崖がある。

そこには石で作られた階段があり、通路として利用できるようになってる。

そこから見下ろす景観は緑一色の森の俯瞰だけだが、浮いている場所がある。

文字通り宙に浮かぶわけではなく、カラフルな屋根がある村だ。  
ピクシーの村だ。一番多い色はピンク。

「見えた」

ユピーは村を指差して、羽を広げて階段を使わず飛び降りる。滑空する。

ユウトは急いで追いかけた。

「ご飯なに?!」

「さあねー？」

アハハ、と笑い声がこだまする。

## 2・ゴブリン&ガールはウォークするナウ（後書き）

### 【次回予告】

孤高の王は世界を絶望に陥れる。

死ねよ、殺せよ、蹂躪せよ。

犯して、奪って、すべてを燃やしつくしてしまえ！、

俺は魔王。ぜつりん魔王。

この世界は俺様のもの。何者にも侵されがたき俺だけのサンクチュアリ。

さあ、闘争を始めよう。領土を広げるために攻め込もう。

右手にカッター、左手にはモデルガン。

敵などいない。俺は最強。俺こそ魔王。

さあ、弔い合戦を始めよう。

死屍累々となった今は亡き戦友のために焰を灯そう。

用意はいいか？

さあ、合戦だ　俺たちの戦いは、今こそ！

なわけがない。

### 3・コボルトはゴブリンにハイトしてデュエルをチャレンジするナウ 改稿（前）

途中から大幅に改稿しております。

美形？ でません。代わりに犬が出ます。

文章直してみました。

少しは読みやすくなってるといういなあ。

### 3・コボルトはゴブリンにヘイトしてデュエルをチャレンジするナウ 改稿

3・

階段が軋む。

大木5本を担いだゴブリンが勢いよく駆け下りているせいで見事なほどに不吉な悲鳴をあげている。

ミシミシ、という断末魔を聞き、ユピーは滑空しながら階段を見た。

( 輝割れてる…… )

どうしようかなあ、と考えるが、一瞬で破棄。

自分に惚れてるドワーフが何人かいたからそいつらに補修させようと決断する。ドワーフからすれば迷惑すぎる問題だ。

だが、ユピーからすればどうでもいいこと。

村の入り口であるピンク色に染められた門をダッシュで潜り、ただいまー、と叫ぶ。

一足遅れて全く息を乱していないユウトが門に木が当たらないように悪戦苦闘しながら少しずつ入ってきた。

「ご苦労様、あ、汗かいてるね。拭ってあげるよ」

ユピーの持つ必殺技の一つ美少女(自称)スマイルを浮かべながらポケットに入っていた手拭を取り出してユウトの頬に流れる汗を拭ってあげる。

いいよ、と遠慮するユウトだが、嫌がられると余計にユピーはやりたくなる。

減るもんじゃないしいいでしょう、と強引にくっついて拭ってや



る。

「……………」

顔を真つ赤にしてやられるがままに立ち尽くすユウト。木々を担いだままおろおろとしながらユピーに遊ばれているのは端から見れば滑稽だ。

村の入り口でこんなふうに遊んでいると、ユピーの楽しげな声に釣られてピクシーたちが続々と集まってきた。

何してるの〜？ と暢気な声でユピーのところへ寄ってくる。

「へへ、見てよ。これ私の新しい玩具〜。いいでしょ？」

「んー、ユウトじゃない？ 確かにいじり甲斐あるわよね〜」

「あ〜、前言ってた照れ屋のゴ布林？」

「お久しぶり〜」

「みんな知ってたの？」

「この子が何年交易の仕事してると思ってるの……？ って、ユピー

「知らなかったの？」

「うん」

「みんな知ってるわよね？」

「ね〜！」

キャピキャピと言わんばかりの囲まれっぷりにユウトはじどろもどろだ。

何をすればいいのかわからないのだろうか、やられっぱなしで立ち竦んでいる。

その眼は微妙に潤んでいた。

「や〜ん、腕は硬いのに頬はプニプニしてる〜」

「この一ヶ月どうしてたの〜？」

「あ、ユウトじゃない！ おっひさー。早速ユピーにいじられてるんだね！」

どんどん来るピクシーたちに囲まれていくユウト。

なんとなくユピーは面白くなかった。自分の玩具で他人に遊ばれるのは少しばかり不愉快だ。

「とりあえず、木を何処に運べばいい？」

唐突にユウトはユピーに話しかける。

ユピーは察した。まあわかっていたことなのだけけれど。この場から逃げ去りたいらしい。

初心だなあ、とユピーは思う。

「きゃく、喋った！」

「ぶるぶる震えてる〜えいつ」

「ねえねえ、頬を赤らめてるよ？」

ユピーはあえて答えないで置いて放置しておいた。

触られ、揉まれ、突かれ、撫でられ、とユウトはやりたい放題にされている。見るからに落ち込み始めていた。

肩をがっくりと落とし、うなだれている。微妙に震えている。

(なんか凹んでるわね)

それを敏感に察したユピーはピクシーたちを「はいはい、散った散った。なんかセンチメンタルになってるみたいだからあっち行って」と言っぴくシーたちを遠ざけた。

なんでよー、と不満たらたら声が多かったが、キッと睨んで無理やり人払いをする。

「今回木を置く場所はあつちよ。ついてきて」

それまでのことはなかったかのようにあつさりと言つてユウトは言う。

ユウトは救世主を見るかのような目でユピーを見上げているので、それが居た堪れなくて素っ気無い素振りをしているのだ。諸悪の根源は無論、ユピーである。

んしょ、と可愛らしい掛け声をあげてユウトは木を担ぎなおすとユピーについていった。

以前来たときとあまり変わらないな、とユウトは思う。ピンクやイエローなどといった明るい染色をされた屋根が目立つ村だ。二階建ての家もあり、ゴブリンの村と違って活気がある。

他の種族も来ているようで、蒼い毛皮に覆われた魔犬であるガラムや、ゴブリンの住まう小屋よりも大きなサイズの怪鳥であるグリフォンなども闊歩している。

ちらちらと魔獣たちからの視線を感じたりしながら、ユウトはてくてくと歩いていく。

この村もゴブリンの村と同様に開墾されてできた村であり、まだ切り開かれていないところももちろんある。

そこを伐採して日々、村は大きくなっていく。

伐採した木で家を建てればいいじゃないか、とも思うかもしれないが、ここの木はブオラの木とは違って建築には向いておらず、ユウトの住まうゴブリンの村と交易をしているのだ。

「こつちよ、こつち」

村の中心にある井戸を超えて、さらに先に行く。

数分歩いたところで、こつちよ、とユピーは言う。なるほど、開けている場所だ。伐採した木々は薪にでもされたのだろう。既にない。ゆっくりと丁寧なユウトは木を地面に置く。

これでお仕事完了ということになる。

「ご苦労さま」

満足げにユウトは嘆息する。

コキコキ、と骨の関節を鳴らしてストレッチをして身体を解す。そして、空を見上げる。太陽は真上にある。飯時だ。

「言っていただろう。ご飯の時間だ」

無駄に爽やかな声でユウトは言った。

何か妙に期待されてるわね、と少しばかりユピーはプレッシャーを感じる。そこまで料理は上手くない。

困ったように頬を掻きながら、

「あの、一応言っておくけど、普通のモノしか出さないわよ?」

小首を傾げて言い訳をしておく。

これを聞いたときのユウトはすさまじい反応をした。  
「驚愕に顔を染め上げて、高らかに叫んだ。」

「普通ってことは石の裏から出てくる虫とか出てくるのか?!」

「なんでそうなる?!」

寸分の間すら与えない神速のツッコミ。

心じゃなく、あまりの事実と身体が反応していた。

虫って。なんで虫?

聞いてみると、辛いことを思い出しているときのように苦渋の色が濃い表情で淡々とユウトは語った。

曰く、

「小さな時、俺に与えられていた飯はそれだった。普通のモノというのはそういうものではないのか？」

「どんだけ。」

「普通というのはね。野菜や穀物、時には小動物の肉だったりよ」

見るからにユウトの口から涎が流れ出ている。

よほど貧相な食事しかしたことがないのだろう。ハブられている、と自称していただけのことはある。ユピーはかつてないほどに戦慄を覚えた。

「イジメ、かつこわるい。」

「なんとか私のプレッシャーは抑えられたことだし。僥倖なのかもしれないわ。ついてきて、こっちが私の家よ」

そうしてユピーは村のほうへと歩き出した。

だが、周辺の木陰から見えるなにかがある。青い、ふさふさした毛がユウトの視界に写る。

何だろう、とユウトはソレを観察していると、ひょっこりと何かが出てきた。

「ユピーちゃん！」

出てきてユピーを呼んだのは二足歩行をする犬。

ユウトよりはいくらか背が高く、革の胸当てをつけて背には身長と同じくらいの木の手を担いでいる。先端には小さな石が埋め込まれている。綺麗な青色の石。

呼ばれてユピーは振り返る。

「ん？ あら、ザツシユじゃない。どうしたの？」

知り合いのようで、ユピーは気さくに返事をした。

その声を聞いているザツシユと呼ばれた二足歩行の犬は深刻な表情。鬼気迫る瞳。勇み、走り、ユピーにザツシユは駆け寄って肩を掴む。

ユピーは少し嫌そう。

「ユピーちゃん。話は聞いていたよ。そのゴブリンに脅されているんだね？」

「何の話かしら？」

「わかっている。わかっているよ。僕の信仰する聖魔神は全てわかっているらっしゃる。ユピーちゃんは」

「うるさい」

ザツシユより頭一つ高い身長を持ち主であるユピーの脳天チヨツブがザツシユを襲う。

「きゃうんー！」

ザツシユは悲鳴を上げる。

少し離れ、膝を折りながらユピーを上目遣いで見る。なんで殴ったの？ ときらめく視線は訴える。尻尾はうなだれ、落ち込んでい

ることがよくわかる。

「何がどうなっているんだ？」

ユウトは状況が全く飲み込めない。

「ああ、うん、こいつはザツシユって言ってね。犬よ」  
「犬じゃないよ！ コボルトだよ！ ユピーちゃんの幼馴染のザツシユだよ！ ユピーちゃん、好きだ！」

簡潔な説明に対する必死の反論。ザツシユは心底叫んでいるが、そうだったつけ？ とユピーはとぼけている。

ユウトは遠慮しているのか。何なら帰ろうか？ とユピーに聞く。何言ってるの？ とユピーは返す。

「ご飯あげるって言ったじゃない。あんなのは気にしないでいいわよ？」

「いや、でも」

「そうだ、帰れ！ 帰れ！」

熱烈な叫びをザツシユはするが、

「うっさい」

と言われてユピーに蹴りを入れられる。長い足から繰り出される前足蹴り。ひうん、とザツシユは尻尾を丸めながら吹っ飛んだ。痛そうだ。

ふう、とユピーは嘆息する。呆れてモノも言えないわ、と身体全身でジェスチャー。

吹き飛び、倒れているザツシユに近づき、見下すようにしながら嘲笑う。

「まったく 少しは落ち着きつてものを覚えないのかしら？ この犬だったらね。どれだけ躡けても間に合わないわ」

「コボルトは誇り高い種族なんだ。誰にも屈しない」

「お手」

無意識での反応か。ザツシユは俊敏に立ち上がり、ユピーの差し出した左手に右手を置いていた。

「……………ハツ?!」

犬だな、とユウトは呟く。

「でしょう? たまに反抗期になるの。私という飼い主に似ないで馬鹿になつてね。実に困るわ。ふふ、犬なのに飼い主に反抗するなんて それすらも可愛いのだけれど」

高笑いをしながらユピーはザツシユの頭を空いた右手で撫でる。

よしよし、と愛でる。

いやよいやよ、とザツシユは首を振る。あまりのイジメにユウトは涙が出そうだった。これは酷い。見るからにザツシユは男だ。こんなことじゃ男の誇りなどズタズタだろう。哀れな。

「違う。僕は犬なんかじゃ 「おすわり」 ちがうつ?!」

即座に座る犬でしかないコボルト ザツシユ。実によく躡けられている。愛嬌のあるつぶらな瞳からは一筋の涙が零れる。震えている。

それを見てユピーは幸せそうに微笑む。

「ふふ、それで、どうしたの? とても面白いのだけれど、私を笑わせにきてくれたの?それなら クフフ、アハハハハハ! 実に、実に笑わせてもらってるわよ。アハハ!」

哄笑するユピーを置いておき、ユウトはザツシユに語りかける。



「俺も笑われた。お前だけじゃない。そこまで落ち込むな。きっと俺たちにも未来はあるさ。だから、そんなに落ち込むな」

ユウトは俯いたままおすわりをしているザツシユの背を叩いて励ますが。

「お前のせいだ」

涙は乾き、ザツシユはユウトを睨み付ける。

「お前のせいだあああああッッッ！ ゴブリン！ お前を倒して僕はユピーちゃんを取り戻す！」

「そもそも貴方のモノになった覚えはないのだけれど」

冷静にユピーは突っ込むが、

「聞こえない！ 僕の耳には何も届かない」

と、ザツシユは耳を手で押さえて聞こえないフリをする。

「ハウス」

小さな言葉。だが、はっきりとその言葉はザツシユに届いた。ピン、と背筋を伸ばしたザツシユは村の方向を振り向いて一目散に走っていった。

「行ってしまった」

ハウスという言葉に反応して立ち去るザツシユをユウトは呆然と

しながら見送っていた。

アハハハハ、とユピーは更に笑う。

家に向かつて神速の領域へ達する速度で駆ける犬はユピーにとつての飼い犬。言う事を聞いている間だけは可愛がつてあげる。

たった数秒のこと。それだけの時間でザツシユの後姿は見えなくなった。

「……」

沈黙。

その沈黙を打ち破るかのように疾走する軽快な足音が聞こえ始めてきた。

ハツ、ハツ、ハツ、と息を切らしながら全力疾走してくる犬

ザツシユ。猛烈に速度に乗りながらユピーの目の前へと戻ってきた。

戻り、ユピーの顔色をチラリとザツシユは何う。

ん？ とユピーは首を傾げるだけ。機嫌は損ねていないことをザ

ツシユは敏感に察し、大きく息を吸い込んで、呼吸を整えた。

そして、ユウトを指差し、

「い、家になんか戻ってないんだからなっ！ 勘違いしないするな

よっ！ 僕はちよつと走ってみたかっただけなんだっ！」

「そう、良かったわね」

ユピーの冷たい言葉にザツシユの尻尾は反応する。へろり、と尻尾は地面へと着いた。

が、冷たい言葉に負けず、ザツシユは一度失いかけた闘志を燃やし、ユウトのことをキツ、と睨む。犬にだって意地というものがあるのだろっ。悲壮な決意でユウトの眼を射抜いている。

「ゴブリン、名前は？」

見下ろし、問う。挑戦的な眼差し。

「ユウトだ」

見上げ、答える。好戦的な眼差し。

交わる視線。男の意地を、心を込める。眼を背けたほうが負けだ。ザッシユは背から棒を引き抜き、ユウトに対して振り下ろす。ユウトは短い足を蹴り上げて、棒を弾いた。

間。

ユウトは笑う。

見て、ザッシユは猛る。

「お前に決闘を申し込む！ ユピーちゃんには勝てないから、お前に勝って手を引かせる！」

「別にいいが、そもそも ムグウ?!」

不意にユウトの口は塞がれる。犯人はユピーの両手。頭の上にユピーの顎が可愛らしく乗せられ、ちょこん、と顔を覗かせる。たったそれだけのことでザッシユの体毛は逆立つ。嫉妬。

(怒っちゃって。可愛い)

などとユピーが考えていることなど知らず、ユウトを見据える眼にはだんだんと濃縮された殺意が込められ始めていく。

楽しくなってきたわ、とユピーは思う。

顎の下でユウトはおろおろとしていることもユピーの心を躍らせる原因の一つだ。そうだ、と思いつく。

「いいわ。ユウトは受けてくれるって言っているわよ」

決してユウトはそんなことを言っていない。

ムグウ！ と反論するかのようにユウトは一際大きく呻き声を上げるが、その声は誰にも届かなかった。

にこり、とユピーはユウトを見下ろしながら笑う。小悪魔の微笑み。美少女（自称）スマイル。

ザツシユの嫉妬がより深まる。

「じゃあ決闘の場所はピクシー村の井戸の前だ！ 待ってるからな！ 逃げるなよ！」

そう言い、ユウトたちに背を向けてザツシユは歩き出した。思い出したようにザツシユは立ち止まり、呟いた。

「ユピーちゃん。勝ったときこそ、僕は」

一陣の風が吹き、小さな声は掻き消された。

だが、その言葉をユピーは理解していた。ちゃんと、理解していた。

「はいはい、ちゃんと貴方の好きそうな骨をあげるわ。しゃぶり甲斐のあるものをね」

理解ではなく、誤解していた。

「そんなのじゃない。僕が欲しいのは」 「しっぽが揺れてるわよ」

正直な尻尾が邪魔だアアア！ うわあああああああッ  
ッ！」

眼にも留まらぬ速度でザツシユは走り去った。

ザッシュが走り去ると同時に、ユウトは押さえられた手を引き剥がし、ユピーを見上げた。

後頭部にユピーの胸が押し付けられていたという事実気づいてはいないのか。ユウトからは羞恥心を全く感じない。

「何よ？」

すぐ近くにユピーの自慢の胸があるのに、それを意識しないユウトに対して少し不愉快になるユピー。

関係なく、ユウトは聞く。

「なんで決闘なんかするんだ。俺は関係ないぞ」

普通の疑問。

はぁん、とユピーは鼻で笑う。

「あら、貴方は武士とかいってなかった？　つまり、戦いが好きなのよね？　まさか逃げるの？」

ふむ、とユウトは考え込む。

「敵に背を見せるは土道不覚悟　だが、あんな弱そうなチビを」

「貴方のほうが小さいわよ。それにあんなナリだけど、ザッシュはコボルトで一番強いわよ？」

「なに？」

ユウトの顔色が変わる。

強者、という言葉に明確に反応した。

やっぱり、こいつ戦い好きなんだ、とユピーは思う。祭りが始まる。

「だって、私は弱い男には話しかけないもの」

そう言いながら、ユピーはユウトの口から手を離して手拭で手を綺麗にした。ユピーの綺麗な微笑のせいでユウトはその事実気づかなかったが。

### 3・ゴボルトはゴブリンにヘイトしてデュエルをチャレンジするナウ 改稿(後)

ほら、面白そうなキャラ思いついたから改稿とかそんなんじゃないの。

俺の脳内の神様が囁いたんだ。

「お前は美形を出していいのか？ 魔獣ファンタジーなのに普通の人型の美形を出していいのか？ それは安易な逃げではないのか？」

つてな。

逃げじゃねえ、つてことを俺は証明したかった。

だつてさ。魔獣ファンタジーを書くこうとする俺だぜ？逃げるとかないつての。マジ。舐めんな神様？ みたいな。

うん、正直美形とかね。死ねばいい。部屋充で友達いない俺からしたら美形とかね。もうね。うん。殺意しか湧かない。ああ、沸くものがある。ヘソで茶を沸かしてやろう。

まあ、というわけでこんなんになった。

誰にも文句は言わせない。

だから、俺はいつだって胸を張ってこう言ってるのさ。

あの、自分勝手に改稿してゴメンナサイ。マジで。

#### 4 ・ゴブリン&コボルトはデュエルするナウ 改訂(前書き)

注：あくまでもゴブリンとコボルトの戦いだということを忘れない  
てください。

文章直してみました。  
アドバイスください



#### 4・ゴブリン&コボルトはデュエルするナウ 改訂

4 .

濃淡の混じる青い毛皮はふさふさとしている。つぶらで常に潤んでいる漆黒の瞳。口から覗く牙は小さい。とても温厚そうに見えるコボルト。それがザツシュだ。

だが、今は違う。ザツシュの漆黒の瞳は射殺さんばかりの硬質な意志を宿し、敵であるユウトを見据えている。小さな牙はかみ締められ、何時でも飛びかかれるように足に力を溜めている。

常ならふんわりとした尻尾は天に向かって屹立している。戦意は十分。殺意も上等。まさしく真剣だった。

皮の胸当てをつけ、背には身長よりも高い青色の石がアクセントになっている棍棒。

手に取り、ぶんぶんと頭上で回転させている。

対峙するはとても大きなワシ鼻が特徴のゴブリン。鍛え抜かれた身体はまるで鋼のよう。盛り上がった筋肉は片袖の服を着ているだけ。そんな力強い躍動を感じる肉体は力みは全くない。

敵であるザツシュを見る目には感情の色はなく、ただ静かに見つめている。武器はなく、身構えることもなく、ただ、そこに在る。彼我の距離は数歩で詰められるほどの短さ。

場所はピクシー村の中心にある井戸の前。周囲には数々の魔物があり、マスコットキャラ的存在のザツシュの勇姿を生温かくにこやかに見守っている。

観衆の中、この決闘を仕組んだ張本人である美少女（自称）であるユピーはとても楽しそうにしていた。

取り囲む観衆の中、一番前に座り、今から始まる戦闘に魂を躍らせる。何故なら、ユピーは祭りが大好きだ。男同士の殴り合いなど、祭り以外のナニモノでもない。

「僕はユピーちゃんが好きだ。決して君みたいな奴に渡さない」

ザツシユは頭上で振り回していた棍棒を振り下ろし、ユウトに対して突きつけて、宣言する。

「僕はユピーちゃんが好きだ。この身を捧げてもいいほどに」

チラリ、とザツシユはユピーを見る。ユピーはにこやかに微笑みながら自分の首を親指で搔つ切るジェスチャーをした。100万年早いよ、犬の分際で。

ザツシユの屹立していたはずの尻尾はうなだれ、地面に墮ちる。それを見守っていたピクシーの女たちは笑いを堪えるのに必死だ。男たちは同情して涙を堪えている。

俯き、落ち込むザツシユの瞳からは何かが零れ落ちた。はらり。だけど！ 叫ぶ。

「僕は諦めない。諦めたらそこで僕の恋物語は終わってしまう。僕は、あの性格を含めてユピーちゃんが好きなんだ。だから、ユウトでいいよね？ 君にはこの場から退場してもらおう。叩きのめして、惨めに地面に這い蹲ってもらおう。そうしないと僕は先には進めない！」

「そうね。勝ったら頭を膝枕をしてあげる」

ザツシユの表情は激変した。目は見開かれ、輝き、希望に満ち溢れている。

尻尾は折れんばかりに振られ、興奮して漏れる吐息は激しくなる。餌を差し出されて「まで」を命令されている犬そのもの。

「負けるわけにはいかないんだ！」

盛り上がるザツシュに対し、ユウトは何も変わらない。

人を馬鹿にするような意地悪に晒い、自分より背の高いザツシュを見下し、言った。

「戦う理由は膝枕か。下らない」

冷徹な声。

「なぜお前はそこまで低い志で戦える。上を目指さないのか？ キスをしたくはないのか？ おっぱいを揉むためとは言えないのか？ 膝枕で本当に満足なのか？」

その時点でお前は負け犬なんだよ、とユウトは吐き捨てる。その言葉はとても重い。気持ち十分に籠った蔑みだからだろうか。

ユピーからすれば異性関係に関してはどちらも同レベルにしか見えないが、そのことに関して追及するのは野暮というものだろう。

「剣を極めるその時まで、俺は女など求めはしないがな。修練の邪魔になる」

この会話。当人たちは至極真面目にしているのだが、取り囲んでいる人たちからすれば笑い話でしかない。何を言っているんだ？ というくらいの内容だ。

ユピーに至っては突っ込みを入れないけど、放って置いたらどこまで行くのかが知りたくて我慢している。震えている。つつこみたい！ でも！ でも！ もっと見たい！

「前口上はこの程度でいいだろう。俺はとても腹が減っている。とても、減っているんだ」

じろり、とユウトはザッシュを初めて睨んだ。

重圧。

観客すらも飲み込まんばかりの圧倒的な存在感。上位の者に殺意を持って見られている感覚。だが、これは別に特定の相手に放っているわけではない。ただ、抑え切れなかった“気”が漏れたただけだ。周囲にはグリフォンやガルムという戦闘に特化した魔獣がいる。先ほどまでのんびりと見ていたそいつらですら、怯え、身体を竦ませる。

村を囲む木に居座っていた鳥たちがざわめき、去っていく。空は何かから逃げるように飛び立つ鳥たちで埋め尽くされた。

動物たちも悲鳴とともに地を駆け、一国も早く危地から走り去っていく。

(なんて恐さ。これが本当に　ゴブリン?)

ユピーは腹に力を込めて、耐える。

本能に抗わなければならぬほどのものだった。そうしなければここから飛び上がり、空に逃げそうだった。

ユピーはユウトが強いとは思っていた。けれども、ここまで圧倒的な存在感を放つほどとは思わなかった。

だって、そうでしょう？　先ほどまでただの初心な子供のようにだったのだから。

「怯えないのか？」

ユウトは問う。

問われた者は敵であるザッシュ。

ん？　と全く動じてないザッシュだ。ユウトから漏れ出す“気”を受けているにも関わらず、完全に平常心を保っている。

「何で怯える必要があるの？」

ユウトが好戦的に笑う。

笑みとは本来 “敵を威嚇するためのモノ”だ。正しい使い方。威嚇するだけの価値がある、とユウトはザツシュを認めた。

「乗り気ではなかったが、気が変わった。徹底的に躑けてやる」

だらりと下げられた腕を上げ、ユウトは始めて構えを取る。

右手を突き出し、左脇を締めて顔のすぐ横に左拳を置いている。

足は手の真下。攻撃的な構え。

対するザツシュはより積極的な構え。今すぐ走り出しそうなほどに前屈み。

「お前を倒して、ユピーちゃんに膝枕をしてもらったッ！」

「人の恋路を邪魔するつもりはないが、お前は俺に負けてもらう」

叫び、ザツシュはユウトに向かって跳躍する。

棍棒に力に乗せるためにまるで弦のように上半身をしならせている。

ザツシュの速度はまさに“目には止まらない”速度。ユウトがかつて経験したことがない高次元のものだ。

ユピーにとっては見慣れた光景。

ザツシュは強い。いつもはあんなにだけ、強い。

ユピーのためにどれほどの敵を屠ってきたことか。ふふ、犬は忠実に働くからこそ可愛いよね。

「オオオオオオオオオオ!!!」

確かな戦意を感じるザツシユの咆哮。

雄叫びとともに放たれた棍棒による突き。その速度は比喩が許されるならばまさに“雷光”。

しかし。

ゆらり、突き出していた右拳で軌道を逸らし、受け流す。

「単純すぎる」

放たれた突きはユウトには当たらず、“雷光”は空気を裂いただけ。

全身全霊の一撃を放ったザツシユは完全に無防備な状態。次の動作に移行するには時間がかかる。

それを見逃すユウトではなかった。

すぐ近くで勢いに流されたままのザツシユの腹に、たった一撃で木を粉碎してしまうゴブリンの中でも別格の怪力を持つユウトの左拳が食い込んだ。

「ウゲツ?!」

打撃。

ただの打撃。

それなのにザツシユの身体は空を舞った。

血反吐を口から撒き散らしながら、身の丈の数倍はある木々を見下ろせるほどまでの高さまで吹き飛ばされた。

歯を食い縛り、棍棒を握り締め、必死に耐えている。

ユピーにとっては初めて見る光景。

(ザツシユが最初の一撃を当てれないなんて)

あんな攻撃は反則だ。勢いもつけずに、身体の捻りだけで生み出

されたユウトによる攻撃。その一撃でザッシュは絶望的なダメージを負った。

馬鹿げてる、としか思えない。

( だけど、ザッシュはあのくらいじゃ倒れない )

ユピーは知っている。

ザッシュの強さはこの程度ではないことを。他の観客も知っている。

何故なら ザッシュはこの村で一番強い【僧侶】シムメンブなのだから。

ザッシュはまだ一度も使っていない。【祈り】を。

「お前には負けてもらおう、と言ったぞ」

ユウトは眩き、右拳で地面を殴る。その衝撃でユウトは空高く飛んだ。

「 負けるわけにはいかないんだ」

ザッシュは全く諦めておらず、むしろ追いかけてきてくれたユウトには感謝すらしているような視線を向けている。

既に落下しはじめているザッシュとそれを追って駆け上がるユウト。

交錯するのまであと僅か。

ぎゅっ、とユピーは両掌を合わせて、目を大きく見開いて刮目して見た。

交わるのは一瞬。

その刹那、それは起こった。

「すいっ」

思わず口から漏れるのは感嘆の吐息。  
両者がぶつかったのだ。

その瞬間をユピーは眼に焼き付けた。

「喰らえツツ！」

繰り出されたのは右拳。

飛翔しながらの全ての勢いを乗せた　まさに必殺と言っている  
打撃。

既に致命傷に近いダメージを受けているザツシュがそれを喰らえばもはや戦闘どころではないだろう。

空気を揺さぶる炸裂。

奏でたのはユウトの拳。それと、きつちりとユウトの拳を受け止めたザツシュの右手だ。

ザツシュは苦悶に顔を歪める。  
が。

「僕の身体に癒しの生命を　【強奪】ダークヒール」

呟く。

ザツシュの手は暗鬱な光が包まれる。

「ぐあああああツツ?!」

ユウトは受け止められた拳に激痛が走る。

そこから何もかもが吸い尽くされていくような不思議な感覚。  
にやり、と牙を覗かせながらザツシュは笑っている。

「チィッ！」



握りとめられたままの拳を起点にユウトはザッシユの腹に足を当てて、跳躍。

理解不能の激痛を喰らったままではまずい、と判断し、遠のくことを選んだのだ。

ストン、とお互いに無事落下。その距離は戦闘が始まったときよりも、長い。

「何だつてんだ。いったい……」

答えをユピーは知っている。

【強奪】<sup>ダークヒール</sup>。相手に激痛を与えながら生命力を奪う【僧侶】<sup>ピシヨッフ</sup>しか覚えられない魔法。特徴はむちゃくちゃ痛いということ。ユピーは喰らったとき痛みあまり泣いたことがある。

それは置いておいて。  
地面に降り立った瞬間、ユウトは激痛を感じた握り締められていた右拳を見た。

激痛を発した右手には異変が起こっていた。  
腕が痩せ細っている。左上の半分ほどにだ。血色も悪くなり、まるで力を入れれない。ユウトの理解の外だ。

ユウトはザッシユのほうを見た。  
疑問符に満ちた表情。

確かに会心の一撃を放ったはずなのに、その腹をユウトの拳で破壊したはずなのに、まったくの無傷。

ユウトはザッシユに打撃を与えたとき、確かに骨が折れる感触があった。そのはずなのに、ピンピンしている。  
それを見て

「ククク」

くぐもった笑い声。

気でも狂ったのかしら、とユピーは思う。ザッシユも同様に不思議そうにユウトを見ている。

それはユウトのことを理解できていない証。これまでのユウトは抜け殻だった。目的のない、哀れなゴブリンでしかなかった。取り戻した。

「ク、ハハハハハ！ 楽しくなってきたやがった。こんなわけわかんねえ場所で生を受けて、喋れる相手もほとんどおらず、孤独に過ごしてきた。することもなく、意味もわからず、ただただ鍛えてきたことが報われやがった！」

歡喜。

「いいぜ。お前、いいぜ。最高だ。犬なんて言っただけ悪かった。志が低いなんて言っただけ悪かった。大丈夫だ。お前は強い」

ユウトは言う。己を試せるという絶好の機会を与えてくれた敵であるザッシユに惜しみない賛美。

「だからさ」

ぞわり。総毛立つ。

先ほどまでの漏れ出す“気”などというものではない。

今度は指向性を持った 別のもの。

ユピーは恐怖した。“気”を向けられているのはザッシユであり、自分ではないのに、考えてしまったのだ。殺されてしまう、と。

ああ、なんとということか。

ユピーは見落としていた。

ユウトはゴブリンだ。ゴブリンなら誰でも持っている 破壊衝動。それがユウトにないはずがない。先ほどまでの“気”に意志が混じる。それは“殺気”。

気でも狂ったのかしら、と先ほどユピーは考えた。それは正解だ。ユウトの眼は悠然と語っている。殺したい、殺されたい、殺しあいたい。そんな退廃的な欲望に彩られている。

一匹の魔獣が凄絶な笑みを浮かべた。

「ルオオオオオオオオ！」

ザッシュの雄叫び。

ここでユピーは気づく。

ザッシュも口角を吊り上げながら、笑っている。

毛を逆立てながら、尻尾を大きく揺らしている。喜んでいるのか。舌なめずりをしながら、ユウトを見ている。

「もっと戦ろっぜ」

さっきまでは怖かった。けど、楽しそうにしている二人を見て感化されたのか。

楽しくなってきた、とユピーは思った。

#### 4・ゴブリン&コボルトはデュエルするナウ 改訂(後書き)

##### 【次回予告】

女を求めて男が争う。

無骨な侍、破天荒な僧侶。

命を燃やして、拳を放つ。

届け、届け、と思いを込めて。

絶対に手に入れる、という決意を込めて。

ああ、勝者は何を手に入れるのか。

それは誰にもわからない。

次回、『ユピーちゃん、脱ぐ』

絶対に見逃すなよッ?!

なわけがry

## 5 コブリンのヘッドはヴェリイハードだとコボルトはアンダスタンドするナ

5 .

ユピーは気づいた。観客は既に自分だけになっているということに。

激戦過ぎて近くにいたら危ないのだと周囲にいた者たちは思ったのだらう。

(もったいない。祭りはこうでなきゃいけないのに)

手に汗握る展開だ、とユピーは思う。

ユウトはザッシュに対して近づいているのがユピーの場所からだとよくわかる。重心を低く落としてのすり足。するする、と距離を詰めていく。

先ほどは初っ端からの全力のぶつかり合いだった。

ザッシュが一直線に突きを放ち、それを迎撃して殴り飛ばしたユウト。

逆。

じりじり、と緩い展開。

だけど。

(怖い)

ユピーにはわからない。身のこなしが圧倒的に高いザッシュが待ち構えている理由が。頭がおかしくなったと思わせるようなユウトが直情的に攻め込むのではなく、冷静に事を進めていく理由が。

互いの距離が近づき、ユウトの攻撃は当たらないが、ザッシュにとっての攻撃は当たるといふ距離。制空圏。

瞬間。

ザッシユは突きを放った。先ほどとは違う、全く溜めのない一撃。それをユウトは見切っていたのか、顔面に向かってくる棍棒を首を捻るだけでかわす。

「さっきも言っただろ。単純すぎる」

後、風が破裂したときのような轟音。耳をつんざく高い音がピクシー村に響き渡る。

原因はザッシユの突きのあまりの速度に攻撃動作の後に音が炸裂した。それをあっさりとかわすユウト。

本当にゴブリンなの？ とユピーは思ってしまふ。

「スピードは良い。俺じゃ絶対に勝てない。けど、腕力ならどうだろうな？」

ユウトはそう言ってザッシユの棍棒を無事な左手で握る。ザッシユは反応し、力を込めて引き剥がそうと大きく身体を捻らせて転倒する。

ユピーから見えたのは自分から横に向かって倒れていくザッシユの間抜けな姿だけだった。

「な、何をしたんだ?!」

ザッシユは尻餅をつきながらユウトに叫んだ。

「合気 つつっても知らないだろうけど」

ユウトは軽い動作で、ふっ、と棍棒を振り上げた。棍棒を握り締めたままのザッシユも一緒に持ち上がる。

動転するザツシユ。あっさりと持ちあげる経験など早々された者などいるはずもない。ザツシユもその一人。ただ愕然とするばかりだ。

「いいか。攻撃つてのはこうやるんだ」

ユウトは棒を引き寄せて、カウンター気味にザツシユに対し蹴りを放つ。かなり間抜けな光景。短足では絵にならない。  
が。

「きゃうんッ！」

ザツシユは苦痛のあまり悲鳴を上げる。

蹴りの衝撃により吹き飛ばされ、何度も地面にぶち当たり、跳ね飛ばされながらピクシー村の中を転ばされる。

棍棒はザツシユの手にはなく、素手。

短足から放たれた蹴りは見た目以上に凶悪だったことをユピーは認識する。尻尾を丸めながらゴロゴロと地面を転がって行くザツシユを見てため息を吐く。

(所詮犬ね)

だが、ザツシユは意地を見せた。

好きな女の子の前なのだ。無様な姿は晒せない、と熱い想いを胸に抱いているのだ。ということにユピーは気づかない。そもそも、興味ないし。

「グ、グルルル」

唸る。

ザツシュは未だに衝撃で地面を転がっているが、爪を地面に突き立てて抵抗し、踏ん張り、立ち上がる。

がくり、と膝が折れかけるが、ザツシュは気合で持ち堪えた。根性あるじゃない、とユピーは感心する。先程まで、所詮犬ね、と考えていたことは既に忘れていた。

「へえ、まだ立てるのか。チャーミングな顔してやる気満々じゃないか」

ユウトは悠然と歩きながら言う。

一歩一歩を踏みしめるようにユウトは歩いていった。身体を大きく見せるように必要以上に胸を張り、身体全身に力を込めて。

威嚇　　というものだ。

「僕は負けてないぞ。僕は誇り高きコボルトの末裔。誰に対しても尻尾なんか振らない。命ある限り抗い続けてやるんだ」

見るからにザツシュの尻尾はぶんぶんと振られている。足は震え、内心怯えているのがユピーにはわかる。もちろん、相対しているユウトもわかる。

思いつきり尻尾振ってるわよ、とユピーは突っ込むが迷ったが、それはあまりにも無粋だと思ったので自重した。

ユウトも同様に空気を読んだのか、尻尾を注視しているが、敢えて何も言わない。瞑目し、何かを考えているようにユピーには見え

た。

「まだ　やるのか？　力の差はもう十分に理解しただろ？」

「わからない。僕がわかっているのはこの勝負に負けたらユピーちゃんの膝枕を味わえないということだけだッ！」

（そんなこと言っただけ）



すっかり忘れていたユピーだった。

強靱な意志で強敵に立ち向かう犬はそんなことを知らず、武器もない。棍棒はユウトに奪われたままで、それは遠くに投げ飛ばされていた。

せばまった距離。わずか数歩の間隔。

ザツシユは思いつき蹴り飛ばされたダメージで身体に力が入らず、ボロボロだ。

ユウトも右腕は使えない状態であり、結構な深手と言っていい。

ユピーの印象からすれば、肉体的な強さは同格だと思う。だけど、明らかにユウトのほうが闘い慣れている。ザツシユの動きを予測して、その通りに事が進んでいるように見える。

絶対的な経験値の差。

そこまで強いゴブリンというのはユピーは聞いたことがない。どこで戦ったことがあるというのか。謎は深まるばかりだ。そんなゴブリンがゴブリン村でハブられて伐採の仕事に就いているのも謎だが、今はそんなことを考えている場合ではない、とユピーは頭を振る。

ザツシユの瞳に明確な意志が写ったから。

「負けるわけにはいかないんだ！ 我が血を代償とし、一対の翼を  
グッドスピード【死翼】」

素早く詠唱。

すると犬には似合わない大きな深紅の翼がザツシユの背中から生える。

グッドスピード【死翼】。展開している間、劇的に移動速度が増幅されるが、常に血を消費する。深紅は血の色に似ている。つまり 翼は噴き出す生命の雫。命を消耗する支援魔法。

(そこまでして膝枕をしてほしいのかしら?)

「綺麗だな」

ユウトは呟く。

そして、泰然と構える。それは地面に根を張った大樹のような大らかな構え。

「受け止めてやる。来いよ」

「ウルオオオオオツツ!!」

ザツシユにはもう棍棒はない。

だが、武器ならある。小さな牙が、鋭い爪が、燃え盛る魂がある。何より速さがある。

思わずユピーは叫んだ。

「頑張れ ツツ!!」

ピクリ、とザツシユの耳が動いたようにユピーは見えた。

そして、満足そうに雄々しく笑むザツシユの横顔も見え 束の間、

ザツシユの姿は掻き消えた。

「音はするんだがな」

ユウトは困ったように笑っている。

ザツシユの動きはさっきまでは“目には止まらぬ速さ”だったが、今は違う。

「見えねえな。どうするか」

それが“目には写らぬ速さ”になった。

当然、ユピーにも見えず、ユウトにも見えない。ユウトがいくら怪力であろうとも、触れられないほどの速度の前では何の役にも立たない。

けれども、ユウトは堂々と構えたままだ。何の焦りもない。

ユピーにもユウトが冷静でいられる理由がわかっている。ぼとぼとと血の痕が地面にこびりついてるから。

【死翼】グットスビートの代償。膠着状態に陥らないことをユウトは理解しているのだ。だから、気を張り巡らせて佇んでいる。

地響きのような地面を駆ける音だけがピクシー村の中を響き渡る。刹那、ユウトは振り向いて左腕を振り上げた。

「チィッ！」

ユウトの腕には爪が深く食い込んでいる。ザッシユによる攻撃だ。背後から狙いすましたその一撃は、ユウトに受け止められたということ。

さらに、ザッシユは口を大きく開き、噛み付く。ユウトの首に喰らい付こうとした執念の一撃。

されど、それはユウトの痩せ細った右腕に阻まれる。

「グウウウ！」

両腕を塞がれたユウトと、牙と爪を喰い込ませたままのザッシユ。さて、これからどうなるのか、とユピーは結末をじっと見届けようとしていた。目を見開き、手に汗握り、興奮気味に食い入るよう見つめている。

「お前は強かった。だけど」

誰にともなく、ユウトは独白している。

両腕の痛みなど感じていないかのような面持ちで、平然と囁いている。

ザッシユはユウトの腕に牙を喰い込ませたまま、見据えている。

「俺のほつが強かった。ただ、それだけのことだ。だから、落ち込むな」

すっ、とユウトは頭を振りかぶった。

ザッシユは驚愕のあまり目を見開く。

「俺の勝ちだ。膝枕は諦めろ」

ユウトの頭は石頭だったのだろう。

振りかぶられた頭はそのまま振り落とされ、ザッシユに向かって襲いかかる。要するにヘッドバット。頭突き。

重い　腹に響く音が落ちた。

「頭突きで終わりって　どうなのかしら。まあ」

後に残るは大きなタンコブをこさえた犬と、両腕をだらしなく落としていくゴブリンと、楽しそうに「勝者　ユウトー！　ってこ」とでいいわよね？」と叫んでいるピクシーだけだった。

## 5. ゴブリンのヘッドはヴェリィハードだとコボルトはアンダスタンドするナウ

### 【次回予告】

柔らかいモノ。

硬いモノ。

雄々しいモノ。

それは、ドワーフの作る武器のことである。

ドワーフは侍に武器を渡さず、侍はドワーフに武器を請う。

意見は違え、意地を貫く。

二人、男の頑固さを競う。

「ユピーちゃんは鉱山の女帝」

刮目して見よ。

なわけがry

## 終章

終

この世に生を受けて何年の時を過ごしたのだろうか。

日付が存在するわけでもなく、ただ漫然と移り替わる四季を無難に過ごしてきたただだから明確な月日はわからない。

怠惰に生きてきた。

惰性で生きてきた。

ただ、身体を鍛えて、何のためかわからないままに時を過ごしてきた。

無意味。

そんなことを考えた時だつてある。

競い合う好敵手もない日々には絶望したことだつてある。

だけど、目の前には今、競い合えるかもしれない奴がいる。

自然と笑みが零れおちた。

倒れ伏し、大きなタンコブをこさえた二足歩行の犬。

ナリはこんなんだけど、以前の好敵手たちよりも段違いの速さを持っている。正直、強かった。素直な戦い方をしてくれたから勝てただけだ。もっと戦術が練られていたら どうなっていたらうな。

ククク、と少しくぐもった声が喉から出てしまう。想像しただけでこんなにも嬉しくなる。ああ、俺は飢えていたんだ。

「 イテテ」

犬は気づき、目をぱちくりとさせながら胡坐をかいて坐り込む。まだ現状を理解していないようだ。必死に周囲を探っている。だが、結論が出たようだ。

「僕は 負けたのか？」

擦れた声で捻り出された言葉は諦観。牙を噛み締め、爪を握り込み、口からも手からも血が流れ落ちていく。

「そうだ、と俺が答えてやるとつぶらな瞳は細められ、一筋の涙が流れた。」

「 チクシヨウ」

「 負けた時は悔しいものだ。俺だって何度も経験はある。わかったつもりになんてはいけないと思うが、わかったふりをしてしまうのは俺の性。ただ黙って見つめるだけだ。」

「……………」

話は途切れ、言葉は無くなる。

暗い雰囲気。

祭りの後の妙な寂寥感を俺は味わっていた。だが。

「ユウト、ザッシュ、お疲れ様だったわね。実に楽しかったわ。手に汗握って興奮して、本当に最高だったわよ？ やっぱり男同士の殴り合いは最高の娯楽ね。堪能させてもらったわ」

全く空気が読めていないのか、頬を紅潮させた可愛らしい羽付き少女が明るい声で離しかけてきた。

ポン、と背後から肩を叩かれた。響き、痩せ細った右腕に苦痛が走る。苦悶。

「大丈夫？」

と少女は顔を近づけて言ってくる。

「まあ、後でザツシュに治してもらいなさいよ。とりあえず、ザツシュ！」

少女は俺の目の前で落ち込んでいる犬に声をかけた。

犬は反応し、尻尾を痙攣させながら少女を見た。

「よく頑張ったわね」

言うなり、犬に近づいていく少女。

犬の目は見開かれ、尻尾をぶんぶんと振るわせて、喜んでいるのが丸わかりだ。

そして、犬のすぐ傍まで少女は歩き、見下ろす形で立ち止まる。

犬はただ黙って少女を見つめていた。

そして、

「」褒美よ」

少女は片膝をつき、座り込んだままの犬の顎を、つつ、と指で持ち上げて、頬に口づけた。キス　というものだろう。



「え？」

犬は戸惑い。

「格好良かったわ」

少女はほほ笑む。

なんとなく、この世界で生きていける、と俺は思った。  
今日はそんな記念すべき日。

「良かったな」

心からそう思えたんだ。

## 終章（後書き）

とりあえず1章終わりー。

というより1話終わりという感じでしょうか。  
序章と終章だけ主人公の一人称ということ。

一応路線としては結構ダーク路線になると思います。

苦手な人はごめんなさい。

人は魔獣を殺し、魔獣は人を殺します。

残虐に殺します。喰らうことだってあります。正々堂々と戦うなんてことはありません。そんなの夢物語だと私は思っています。

こんな始まりかたでギャグ路線に行くか、とも思われているかもしれませんが、それは たぶんないです。

つまりあれです。

好き勝手やるんでヨロシク！

## 二章の序章

序・

ゴブリン村から少し歩いたところには鉱山がある。

そこからは質・量ともに豊富な鉄鉱石が採れるのだ。当然、ドワーフがそんなものを放置するわけもなく、鉱山の中に町を作って住み着いていた。

鉱山の町【鍛冶神の巣窟】と呼ばれるそこには多くの職人がおり、フィッツネルの森にある建築物や武器や防具、果てには家具なども作成している。

中でも最も魔獣たちに求められるのは鉄鉱石を用いて製造される武器や防具だ。もつと強く、もつと軽い武具を創造するため、日夜ドワーフたちは凌ぎを削っている。

そのドワーフたちの中でも随一の鍛冶師と呼ばれるフィリスは今、外れにある小さな工房の中で、跪き、泣き叫んでいた。

ドワーフのほとんどは男として生まれるが、フィリスは女だ。男とは違い、細い身体をしている。どちらかといえば凛々しい顔立ちをしたボーイッシュな女の子だった。が、その凛々しい顔立ちは今、とても歪まされている。

歪ませているのは一人のピクシーだった。薄暗い工房　光源はランプ壁に掛けられたランプだけなのだ　の中で、ほのかな光で映し出される顔はとても美しい。新緑の恵みであるかのような髪は肩ほどまで伸ばされており、大きく蒼い瞳はすぼめられている。頬は赤く上気しており、とても楽しそうに笑っている。

「ねえ、なんて言ったの？ 私には聞こえなかったのだけれど……もう一度言ってくれないかしら？　ねえ、フィリス。貴方は私に何と言ったのかしら？」

凜とした声が工房の中に鳴り響く。

楽しくて楽しくて仕方ないという嗜虐的な笑みを浮かべたピクシ―は、これでもか、と言わんばかりにフィリススの小さな頭を踏みつけらながら、威圧的に言った。

こんなことをしていることを他の人が見れば、イカれている、と思うだろう。だが、イカれているのは誰なのか。

踏みつけられたまま、涙を浮かべてフィリススは……。

「申し訳ありません！ ユピーさま！ 私が……私が階段の修理をしなかったばかりに！ すみません！ 本当に申し訳ありません！」  
「そう わかっているのならいいのよ？ フィリスス。わかつているのならそれでいいの。それで、どうするの？」

ぐりぐり、とピクシ― ユピーは踵をフィリススの後頭部に押し付けながら聞く。

「直します！ 修理しますからあ だからあ」

「だから？」

「踏むのをやめないください！ お願いです。ああ、ユピーさまの足に踏みつけられているというだけで私は至福の時を過ごさせてしまいます。とても とても良い匂いです。ハアハア、気持ちいいんですうつつつつ」

「ふふ、気持ち悪いわね」

すっ、とユピーは足をどける。ああああああ、と悲しそうな声をフィリススはこぼす。

そんなフィリススの髪を掴み、ユピーは工房の中を引きずり、身だしなみをチェックするためにあるのだろうか、鏡の前に立った。

そして、顔が映るようにぐいっつとフィリススの頭を鏡の前に突き

出した。

鏡に映る顔は悦楽に塗れ、口元からは涎を垂らし、頬は上気し、目は虚ろだ。それでも、これだけはわかる。とても、幸福なのだろう。だらしのない幸せを撒き散らしている。

「だらしのない顔。醜いわ。とても醜い。ねえ、直視しなさい。貴方、とつても不細工よ？」

ふふふふ、と抑えられない笑い声をユピーは漏らす。

フィリスはユピーの声で己を取り戻し、初めてユピーの力に抵抗した。

「いや、こんなの私じゃないです！ 私は 小さな 」

「こんな 何？ 正解を言えたら、足を舐めさせて上げる」

「う、うとう、ああああああ、私 私はああ ユピーさまに踏まれて喜ぶ よろこぶ……ぶ……」

先は言えないのだろうか。フィリスは口を嚙む。

その反応を見て、ユピーの笑みは深まる。にんまり、とフィリスを虐めたくて仕方ない、という表情を映し出す。それは鏡にもしっかりと映し出され、その表情を見たフィリスは細められた瞳から涙を流す。

「 奴隷ですうとう」

「いいわ。正解よ。とつても正解よ。だから、ね？ これから楽しみましょう？」

言うなり、ユピーはフィリスの着ているくすんだ赤色の厚いジヤケットを脱がそうと、胸元にあるボタンを外していくが、空気を読めない馬鹿が来た。

ガチャリ、と工房の扉が開かれる音。それとともに入ってきたのは一匹の魔獣。ゴブリン。背後にはとても大きな台車の中に置かれた、どれくらい重量があるのかも想像させないくらいの巨大な鉄鉱石がある。それを運んできて、フィリスに報告しようとしたのだらう。

報告しよう、と思っただけなら、ユピーがフィリスの服を脱がそうとしている光景。あまりのことにどうすればいいのかわからず、ゴブリン。ユウトは何も見なかったことにし、扉を閉めた。

「な、何だったんだ。今のは。見間違いか？」

扉を開けたときの光景をユウトは思い返しながら、必死に胸の中で脈打つ心臓を抑えようとしていた。

ユウトはバイトをしているのだ。ザツシュとの一戦で刀が欲しいと思い、刀を作ってもらったために、実力のある鍛冶師を探し、フィリスと出会った。そして、鉄鉱石の採集を集めてくれたら作ってあげる、と言われて必死に頑張っただけで採取していたのだ。

ユウトが採取してきた鉄鉱石の量は実の数百kgを超える。たった一回で、だ。この鉱山はほとんど鉄鉱石で出来ていると言っても過言ではないくらい、掘れば掘るほど出てくるのだ。

まあ、それは置いておくとして、ユウトは混乱していた。股間が膨れていることからそれは実に明確にわかるといえるものだ。

落ち着け、落ち着け、と自分に言い聞かせ、ユウトは扉に耳をくっつけて中の音を聞くことにした。

「ふふ、邪魔が入ったけれど、どこかに行ったわね。さあ、続きといきましょうか。フィリス。たっぷり鳴かせてあげる」

「あ、ああああ、ユピーさまああ」

という甘い声がユウトの耳に届く。激しい動悸を抑えることなどできない、とユウトは確信した。かつてしたことがないほどの確固たるものだった。

「ユウト……早いよ。少しは待ってよ。一応は僕も手伝ってるんだからさ」

聞き耳を立てているという無様な体勢のユウトに、やっと追いついた、と言わんばかりに疲労困憊のコボルト　　ザツシュは声をかけた。

いつもつけている皮の胸当ては土に塗れてどろどろで、海を思わせるような青の毛皮は煤けている。ザツシュはユウトのバイトの手伝いをしていたのだ。

なのに……。

「黙れ。いいとこなんだ」

と恩を仇で返す、という言葉の正しい利用方法を体現しているユウト。

ビキ、と毛皮の奥にある地肌に青筋が立つザツシュだが、我慢強いことが売りなのだ。くうるになれ、と自分に言い聞かせながら、何をやっているのかを聞くことにした。

「わからないのか。中で起こっている真実が！」

常ならずユウトが熱くなっているという事実気づき、ザッシユも耳を澄ませた。扉に耳を当てる必要すらない。コボルトの耳は犬並みなのだ。

「ちょ、ユピーちゃん何をしてるの?! 僕のユピーちゃんがあああ!」

即座にザッシユは暴走し、扉を蹴破つて中に入って行った。

ユウトは何となく逃げ去り、その後には工房から大きな炎が吹き出てきた。炎に炙られたのは犬一匹。瀕死の体で転がり出てきた。

「あちっ、あち!」

と叫ぶザッシユにユウトはどこからか持ってきた水をぶちまけて消化した。

その間に中からユピーが出てきて、焦げているザッシユを恫喝する。まずは蹴りを一発いれる。熱さのあまりそこらを転がって丸まっていたザッシユはボールのように跳ね飛んでいく。

「きゃいん!」

悲鳴を上げてごろごろと転がるザッシユ。だが、ユピーはそんなものに取り合わない。

「うるさいわね。お楽しみ邪魔をしないでくれるかしら って、ユウト。貴方もいたの? さっき乱入してきたのは貴方だったのね もう、言ってくればいいのに」

「あ、ああ、ちなみにそこで燃え尽きているのがザッシユだ」

「なんでザッシユがこんなところに?」



取り合わないのではなく、気づいていなかったのだろうか。あ  
やだ、私ってドジ、とペロッと舌を出して言うだけで全てを終わ  
せようとしている。

「いろいろあってな」

ユウトはもう何が何だかわからなくなっていた。

ザッシュは、燃え尽きて、蹴り飛ばされ、気を失っていた。

そして、ユピートの背後では、ユウトの雇い主であるフィリスが  
脱がされたジャケットを慌てて着込もうとしていた。

混沌、という言葉が相応しい。

「ユウトとザッシュに会うのも久しぶりね。フィリスと遊ぶのも  
少し飽きたし、中に入りなさいよ」

「ここはお前の家じゃないだろ」

「小さいことは気にしないほうがいいわよ。ね？ フィリス」

「は、はいいー！」

「……ザッシュが起きるまでは一応介抱しておくよ」

そんなこんなで、ユウトとザッシュ、ユピートは再会した。実に二  
ヶ月ぶりのことである。

## 二章の序章（後書き）

うん、改訂飽きたから続き書いたんだ。文句は言わせない。

あのね。俺だつて頑張った。けど、改訂つてつまんないよね。うん。明日から頑張ろうと思う。

だから、今晚だけはおおめに見てほしい。許してほしいなんて言わない。許せ。

うん、それで続きを書いてたんだ。

けどさ、これ何なの？ 主人公がハーレム構築つてわりと見るし、主人公の親友がハーレム構築つてのもわりと見るけど、ヒロインがハーレム構築つて何なの？ しかも文武両道とかいうレベルじゃないよ。両刀だよ。やばくね？ 倫理的にやばくね？

しかもさ。うん、あの、うん。ごめん。

最初はドワーフはおっさんにして、あの台詞をおっさんドワーフに言わせるつもりだったんだ。けど、嫌だよな？ そんなの見たくないよね？

「ユピーさまああ！ ワシの　ワシのを踏んでくれええ！　もつとおおお、ああああん」

なんて見たくないよね。

見たいって言ったやつはね。うん、猛者だと思う。俺のいるレベルの遙か上にいる天上人だと思うんだ。

で、まあ、うん。やつちやっただ。

でも、実のところ後悔はしてない（キラッ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4364j/>

---

ゴブリンなめんなよっ？！

2010年10月10日19時32分発行